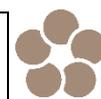




『こもろのひろば こぼれ話』



～郷土の事柄をわかりやすく紹介するコーナーです～

「あなたは知っていますか？ 小諸の小路」

先日図書館に「小諸市役所の前から黎明堂書店に上っていく道を“六三小路”と呼ぶそうだが、それについて書いてある本はありますか？」という問い合わせがありました。職員もそう呼ばれていた事を初めて聞いたので、早速調査してみました。

問い合わせされた方から「その道は明治以降にできた道だと思う。」という情報があったので、まずは江戸時代の資料『小諸温古』『小諸砂石抄』から調べてみました。こちらの資料には小諸の地名の由来などが書かれていましたが、そこにはやはり“六三小路”の名前は出ていませんでした。続いて荒町の歴史について詳しい『小諸荒町と和合会の歩み』を確認したところ、明治中頃にその道の付近に「六三銀行」（現在の八十二銀行の前身）があったという事が書かれていました。おそらく関連があると考えさらに調査を進めたところ、『こもろ抄 こもろタウン情報第5号』の横町や小路についての特集の中に“六三小路”について書かれた記事が掲載されていました。掲載されていた記事には「県内第二位の六三銀行があった。昭和6年、第一位十九銀行と合併、現在の八十二銀行となる。」と書かれており、他には「飴屋小路」「牢屋小路」などが紹介されていました。

六三銀行（正式な表記は六十三銀行）は明治11年（1878）に「第六十三国立銀行」として松代町で設立し、明治30年（1897）に私立銀行に転換して「六十三銀行」に改称しました。六十三銀行は徐々に事業を拡大していき、明治34年（1901）には小諸の塩川銀行を買収して荒町に支店が設けられるなど、長野県内に広く進出していきました。その後昭和4年（1929）の世界恐慌により生糸価格が暴落し、蚕糸業が盛んだった長野県は深刻な不況に陥り、当時県内でも大手だった六十三・十九の両銀行が合併して長野県金融界の立て直しを図ったそうです。

道の名前から町にあった銀行にまで調査が波及しましたが、無事に調べたかった事がわかりました。皆さんも日常のちょっとした疑問を図書館で調べてみてはいかがでしょうか。

普段何気なく通っている小さな道にも、名前がついているのには驚きましたわ。些細なことでも調べてみるといろんな発見があって面白いですね。



こもろのひろばキャラクター

いしがみばんじょさん

【参考資料】

『近世の小諸史料』 飯塚道重／編・訳（1988）

『小諸荒町と和合会の歩み』 塩川友衛／編（荒町和合会 1993）

『こもろ抄 こもろタウン情報第5号』 こもろ抄編集部／編（アイク 1995）

『八十二銀行八十年史』 株式会社八十二銀行／編（2013）